

セブンリベラルアーツ成立前史：その淵源にみる プラトンの構想

Prehistory of the seven liberal arts : Initiatives in its embryonic period by
Platon

構想

2004, volume 3
69 - 75

半田智久 (静岡大学) *

Motohisa HANDA (Shizuoka University)

はじめに

リベラルアーツとはなにか。この問いを発すると比較的明確なかたちでその意味が語られる反面、その解釈や説明にかなりのぶれをみることが少なくない。たとえば、ある日本の大学のホームページには自学のリベラルアーツプログラムを紹介する冒頭で「リベラルアーツの発祥の地であるアメリカでは、市民として持つべき教養・知識を指します」と記している。これを字句どおり解釈すれば、リベラルアーツの歴史はたかだかこの数世紀内のことで、新大陸思潮のひとつかと思われよう。だが、これはいわゆるリベラルアーツカレッジと称する機関を指した言葉足らずの表現にちがいない。

こうした極端な変形も含みながら、リベラルアーツに関わる言表には多分に評価的な表現が多少の思い入れも感じさせつつ、両価双方の地点から述べられることが多分にある。したがって、その背景にはなにか容易ならざるものが潜んでいることを直感させる。また、このことばが前面に押し出されて語られる場合、キリスト教を背後においた一般教育の文脈のなかで語られることが多い。したがって、少なからずこの宗教との関わりを抜きには理解できそうにないことも予想できる。

さしあたり国語辞書を引いてみると、そこには「職業や専門に直接結びつかない教養。また、そのための普通教育(大辞林,1993 以下同)」であるとか「日本の新制大学の教養課程で行われる一般教養を目的とした教科(広辞苑、第5版1998、以下同)」あるいは「自由科」それは「ギリシア・ローマ時代からルネサンスにかけて一般教養を目的とした諸学科。すなわち文法・修辞学・論理学の3学および算術・幾何学・天文学・音楽の4科

の7学科。自由七科(広辞苑第5版)」といった説明がなされている。しかし、こうした説明により、なぜそれが自由術なり自由学術になるのかといった問いにはじまり、そこに並べられた科目の由縁など、謎は一層深まることになる。また、ここにある不可解さが場合によってはいいように使われてはいないか、といった感触も生まれる。

そこで本稿では少しこのことばの背後に足を踏み入れて、それらの謎解きを試みてみた。むろん、辞書にあるように長い過去をもつことばであるだけに、その歴史的な考察はすでに幾多の研究によって積み重ねられてきたことが察せられる¹⁾。だが、こんにちこのことばにもっとも近いところにあるはずの大学の場においてさえ、冒頭の例のみならず、その解釈はほとんどその過去やその過程での研究成果が響いておらず、表面的な理解や思いなしに基づいている傾向が強い。そこには研究成果を的確に参照していない今の人たちの責任もあるが、成果が思いの外、埋もれてしまっ見えにくくなっていたり、常に埃を払い取る仕事疎かにされてきたということもあるだろう。だから、ここであらためてその過去に光を当てることは意味があると思われる。またそれをするからには新たな面も照らし出そうと思う。まず、もっとも最奥の部分に光を投じてリベラルアーツ成立の背景をクリアにし、つぎに少し広角度の照射を試みて、その長い歴史を貫いて認められるリベラルアーツの宿命ともいえる特質についてあきらかにしたい。

本稿では前者、とりあえず先の辞書にみられた自由七科に至るまでの前史において、リベラルアーツ誕生にあたり産婆となったソクラテスと、そのものを産んだプラトンの、その子育てにかかわるリベラルアーツ誕生前史の構想に焦点をあわ

* E-mail address : handam@nzm.jrnet.ne.jp

せよう。

リベラルアーツの淵源

リベラルアーツの発祥が米国にあるという誤解はともかくとして、セブンリベラルアーツが中世西欧の大学で必修科目とされていたという話はよく耳にする。そのことからこれが何やら中世11世紀頃に西欧に誕生した大学の成立とかかわり、このあたりを起源にするものかと思われがちにもなる。だが、実際、セブンリベラルアーツの成立はそれよりも優に1000年遡った時点にあり、7つの科目に構成される以前のリベラルアーツの発祥となると、さらにそこから3～500年は遡ることができる。つまり、そのオリジンは遙か遠く古代ギリシア時代に行き着く。

たとえば、セブンリベラルアーツを構成する4科、これはquadriviumという名でカテゴリー化され、別称はmathematica、つまり数学に関わる諸学のこと、すなわち算術、幾何、天文、音楽である。数学諸学に天文と音楽が入っていることをいささか奇妙に思うかもしれない。しかし、数学が天文の運行に対する古代人の観察に由来し、また音楽の音階、リズムやハーモニーへの関心が原点になっていることからすれば、その起源において数学に連なっていることはごく自然なことであった。これらのつながりは「万物は数である」としたピュタゴラスとその学派の扱ったテーマであった。だから、そのシーズをたどるなら少なくとも彼らが思索を展開した紀元前6～5世紀にまで遡れる。

ただ、ピュタゴラスがこれらの学を秘術や教団教義に結びつけていたことはよく知られているが、自由という概念と結びつけて語った形跡は見いだせない。だから、ピュタゴラスをリベラルアーツの源泉とみるには無理がある。では、源泉そのものはどこか。つまり、これらを自由という概念に結びつけて語った大本はどこか、と尋ねれば、これはまたあの人、ホワイトヘッドにその後のすべての哲学はその人の注釈にすぎないといわしめたプラトんに、—それゆえにこれ自体はいささか面白味に欠ける事実といわざるをえないのだが—、見いだされる。

プラトンはその著作の各所で自由人について語っている。その自由人とは何か。たとえば『テアイテトス』のなかでソクラテスの語りを通じ、

こう説明している。

「自由人とは奴隷や家来とは違い、知を愛し自由の追求について鍛えてきた人たち、時間の余裕が不断にそなわっていて、その言論なども平和のうちに悠々閑々とおこなわれる。議論の目的も真実あるところのものにぶつかることにおかれる。だから、自由人の話が長くなるか、短くてすむか、何度も言い直されたり、話題が変わったりすることなどは気にしない」。

自由人に対置された奴隷や家来の範疇には法廷弁論家に代表されるソフィストたちも入っている。ソフィストたちはいつも時間に追われ、忙しい身であちこちかけずり回り、功利的に目的を果たすことにとらわれている。経済、権威、名誉、その目的が何であるにせよ、それに拘束され、なるべく早く確実にそれに達しようとする。そのために次々と課題や仕事を見つけ、あるいはつくり出して、その山のなかで汲々としている。進んでつくり出す忙しさのなかで、中途半端に仕上げる仕事を正当化するために修辞を使い弁論術にうったえて切り抜けたりもする。そうした経験を繰り返すうちに、話し方だの見せ方が何よりだいじだという思い込みを強くしてしまう。

他方、まわりで悠長に真実などというものを求めて微にいり細をうがち果てしない語りをつづけている人を見ると、我慢できなくなる。そこでそうしたふるまいの糾弾もまた自らの仕事として引き受け、自由人が若者たちをたぶらかし、疑い深き思考を育て、誤った道に導く者だとして訴えることになる。むろん、それは自由という情況がもつ厳しさに耐える精神を学べず、ゆえにそれをもてないことからくる羨みとみずからの挙動に自省しうる弱みの投射によるところが大きい訴えにちがいない。

だから、ソクラテスはその訴えをしりぞけ語りつづけることもできたのだが、あっさりとそれを受け入れ「いとも無造作に、平然と(『パイドン』)毒杯をあおぐ。それこそ自由人であった証。その選択により彼の魂は人知の及ぶかぎり恒久の命を得、身体という棺桶に閉じこめられた死すべき運命からの自由を得たともいえる。

プラトンは若きとき、この師ソクラテスの去就に触れ、その語りを借りてみずからの知を愛する自由人の思想を重ね合わせ、綴り残した。しかも、書き残した内容は師に沿いながら、その語りをつ

うじての拡張であったが、その営みとして魂を身体の拘束から解き放ち悠久の命を与えたその手法は、書きことば、文章表現の力に全面的に依拠した。『パイドロス』の問答にはつぎのようにある。パイドロスが確認する。話し言葉こそ「ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉。それに対して書かれた言葉は、これの影であるといつてしかるべきなのではないか」、ソクラテスの答え「まさしくそのとおり」。

知を愛してやまない自由の人プラトンは、このように書き記すことで、自分がその影であることをあらわしたとも受け取れる。

師の自由性は書きことばとして残ることからも解き放たれている徹底したそれであった。だが、そのことを伝える任を引き受けたプラトンは、その作業をつうじて書きことばのもつ自由性を師の考察を超えて、その実践において確実に果たす必要があった。この矛盾の止揚が対話篇の制作に結実した。しかも、今から23世紀も遡る著作であるにもかかわらず、それがほとんど欠落なく現代に伝えられているという驚異的な事実は、彼が書き綴るだけでなく、それを後世永劫に伝えられるよう周到な保蔵策を講じたことを推測させる。アカデメイアは教育機関であっただけでなく、大量の写本はもちろん、可能なかぎりの方策をつかってみずからの著作のアーカイブ化を果たす場所だったのかもしれない。その設立場所がアテナイでも古来、神域に当たるところであったことも保蔵に関係したことを推測させる。

プラトンはピュタゴラスのような教義はもたなかったけれども、その著作に対する意識の仕方はほとんど教典のごとくであった。今に伝わるこの証拠から、彼自身が修辭—弁論の意義を認めていなかったはずはない。しかし、ソクラテスの語りにもとづきその思想を書き残し、同時にその語りを借りてみずからの思想を重ね描きしていくという手法をとった以上は、師の思想の一貫性をあからさまに崩す内容を書き記すことはできなかったのだろう。それをすれば影としてのプラトンは消えて、たちまち師の前方に姿をあらわにしてしまう。生涯をかけて浮き彫りにしたソクラテスの立体的性も失われてしまう。

そこでプラトンは書き記すという「実践」を確実に果たすことに意を注ぐことによって、師の思想の一部に対する乗り越えを行為事実をもって示

したのだと思われる。そして直に弁論や論理の意義を書き記す仕事は、ソクラテスに接することがなく、それゆえ義理もなかった弟子のアリストテレスに任せただろう。アリストテレスがプラトンのアカデメイアで学び、講義をもったときに、すでにその主題が弁論術であったという記録からしてもこのことは読みとれる。

このようなプラトンにみられる節制こそ、知っていること以上に知っているかのように語り尽くし、またそれによってみずからが知ることに對する欺瞞に陥ってしまう放縱を忌避した自由人のとる術の基本でもあり、リベラルアーツの淵源がプラトンにあるといいうる大きな理由のひとつになる。

その術を十全に使う人こそ戦士にして知を愛求する人、そして国の守護者になりうる人だと考えたプラトンは『国家』において、そこへと至る具体的な教育プログラムを提示している。もちろんこのプログラムについては、哲学や教育学の分野では昔からたくさん書物において繰り返し引用されてきた(e.g., Nettleship, 1935; 白根, 1952; 稲富, 1980)。だが、その外側では意外に知られていない。リベラルアーツをめぐる会話のなかでも平気で抜け落ちる。ゆえに本稿の目的にそくし、そのプログラムを簡単に紹介しておこう。

まず、およそ20歳までの少年期になされるべき教育は、音楽・文芸と体育や体験学習で構成される。ここでいう音楽とは歌詞、音階、リズムといった内容が主になる。音楽・文芸と組みにして記述するのは、その歌詞や詩、物語など、つくりものの話、それらをもとにしたことばの学習が含まれるからである。これらは体育が身体をつくるように、魂をかたちづくる。ゆえに、物語の内容は人間や世の中の善良な部分からなるよう選定され、語り方や調べ、リズムにも十分な配慮が求められる。

すでに述べたように音楽は数学に通じている。だが、それはのちに登場するもので、この段階の音楽ではない。これら魂を養ういわば感性の育成は将来、国の守護者になるような人でも、靴づくりや建築といった仕事の職人になる人でも、すべての人に共通して子どもの時分に求められる教育の基本となる。ソクラテス/プラトンはいう。

このように、「しかるべき正しい教育を与えら

れた者は、欠陥のあるもの、美しく作られていないものや自然において美しく生じていないものを最も鋭敏に感知して、かくてそれを正当に嫌悪しつつ、美しいものをこそ賞め讃え、それを飲みそれを魂の中へ迎え入れながら、それら美しいものから糧を得て育くまれ、みずから美しくすぐれた人となるだろう」。

音楽・文芸の次には体育がくる。これは競技者を育てるようなそれではなく、先の音楽・文芸の姉妹にあたり、単純素朴なものを指している。つまり身体を良好な状態に保つための体育である。したがって、このなかには食事内容や生活法、いま流に言えば生活習慣の整序も含まれる。

体験学習ではたとえば、「戦争に連れて行って、馬上からこれを見物（『国家』、以下の引用は同書）」させたり「血の味を経験させ」たりし、いわゆる身体性に依拠した学びがおこなわれる。この点は音楽・文芸に対する慎重な配慮と一見矛盾するようにもみえる。だが、前者はつくりもの、すなわち人間のイメージーションにかかわることからで、その増幅は真実性を越えてどこまでも進むものである。それに対し後者の体験学習は現実そのものの一端であることからすれば、柔らかな魂にとっての配慮としての的を射ているといえるだろう。この点は半田(2002)の構想論における間接構想と直接構想の弁別と比較に重なるところである。

こうして20歳ころにいたると、前奏曲というべき学問に入る。ここで登場するのが算術、幾何、天文、音楽である。ここでの音楽の主題はたとえば音階の調和をなす運動としてのハーモニーであり、それが算術をとおして扱われる。これらの学問はいずれも感覚だけでは捉え知ることができず、おのずから理性をもって知ることが求められる。

ここにおいて彼が自由にこめたもうひとつの大きな意味があきらかになる。つまり、それはわたしたちの世界観が感覚にとらわれて、制約されてしまいがちであることから解き放たれ、感覚の奥にある人間の理性によって目にみえず、耳に聞こえぬ実在をおさえ、そこに広がっているはずの世界の真実に接近していく自由である。それはまた「魂の内に本来そなわっている知の機能が無用の状態から救って、役に立つものにしよとする」ことでもある。したがって、ここでいわれる天文

学も、目にみえる星々のそれではなく、音楽も耳に聞こえる音そのものではない。

プラトンはいう。

「天空を飾る模様は、そうした目に見えぬ実在を目指して学ぶための模型としてこそ、これを用いなければならない」

そしてそれらの学術は、

「魂のうちなる最もすぐれた部分を導いて、実在するもののうちなる最もすぐれたものを観ることへと、上昇させて行くはたらきをする」。

これこそまさに洞窟のなかで模像の影だけを知覚している囚われの身から解かれて太陽の照らす外界へと開かれていく自由の術である。

さて、これら青年期の前奏曲としての学問課程は最終的にはそれまで、

「ばらばらに雑然と学習したものを総合して、もろもろの学問がもっている相互の間の、また実在の本性と、内部的な結びつきを全体的な立場から総観する」

ところを目指していく。その結果、総合的な力をもつことができた者は、いよいよ本曲であるところの哲学的問答法の養いへと入っていく。そうしておよそ30歳に至ったころ、

「予選された者たちのなかから選抜し、さらに大きな荣誉ある立場に置かなければならない」

とする。その荣誉を担った者は、もっぱら哲学的問答法の力の錬磨にあたる。感覚にとらわれずに、また、法を無視する精神にかぶれることもなく、遊戯のごとく面白半分相手に反論することもなく、真理を伴侶としつつ実在そのものに至ろうとする学びに入る。この言論の修練を5年間ほど集中しておこない、35歳ころにふたたび、戦争にかかわる事柄の統率などにかかわる役職を義務として課す。

さて、ここに至りわたしたちは、これがソクラテスの口を借りたプラトン自身のいわゆる哲人王へと至る選民教育の段階に入っていることに気づく。それはむしろここでの主題が著作『国家』に書かれた国の守護者づくりの方法なのだから、当然のことといえる。このあとこの選ばれし者たちは公務におよそ15年の試練を受ける。そして50歳までにそれらをまっとうした者がいよいよ最後の目標へ導かれ、哲学に時を過しつつ、順番を待ち、やがて出番が来たら国家のために守護の任につくとする、それは本人の好みの問題ではなく使

命だとする。

同書のなかで少年期の学びを詳述している段では、

「それらを教えるにあたっては、けっして学習を強制するようなやり方をしてはいけない」

と強調し、

「自由な人間たるべき者は、およそいかなる学科を学ぶにあたって、奴隷状態において学ぶというようなことは、あってはならないからだ。じじつ、これが身体の苦勞なら、たとえ無理に強いられた苦勞であっても、なんら身体に悪い影響を与えるようなことはないけれども、しかし魂の場合は、無理に強いられた学習というもの、何ひとつ魂のなかに残りはしないからね」

という印象的な発言をしている。このことは自由の術を会得する過程とその後の学びの性質の違い、言い換えれば、自由の術と為政や守護という職人術を学ぶことの相違をあらわしたものと見えるだろう。ゆえに、このプラトンのプランでは、およそ30歳までの前奏曲と称された10年間にセットされた算術、幾何、天文、音楽の4科をつうじての総合力の錬成、そしてその後およそ5年間におこなわれる専修的な哲学的問答法の養いにおいて自由術の育成と完成が構想されていたとみてよいだろう。

この15年間にあてられた自由術の養いが古代ギリシアの時代ゆえのことで、現代ではそれが大学の学士課程ないし大方のところではその初めの1、2年間でこと足るものと考えるか、それともいつの時代にも通じる人間の心身に普遍的な性質をおさえたものとみるかは、だいたいな考えどころといえるだろう。

以上より、リベラルアーツの淵源においては、数学的諸学4科がピュタゴラス由来の種を蒔いたプラトンの手によって芽吹いたことが確認できたわけである。しかし、それがはじめに触れたようにこんにちでは3学の方が先にきて、主であるかのように語られる傾向があるのはなぜか、そこにはその後のセブンリベラルアーツ成立の事情が絡んでくるのだが、この点は本稿の範囲を超えるので機会をあらためたい。

ただ、ここでは3学、文法・修辞学(弁論)・論理学(弁証)が、このあとどのように加わったのか、その経緯について少しだけ触れておく。すでに述べたようにプラトン自身はこれら3学が自

由人の知、知を愛する者たちにとって不可欠の学問としてあることは十分に認識のうちにあったと思われる。ただ師ソクラテスの影としてその知の成果に永遠の命を与え、かつその超克により知りえたことを実践をもって後世に伝えようとした彼の正義と節制に満ちた構想のラインにあつては、あくまでソクラテスの語りに沿って、詩作が軽んじられ、とりわけ師の魂の自由を確保するため、弁論家たちの修辞は否定されたのだろう。

その場面は対話篇をつうじて枚挙にいとまがないが、たとえば『パイドロス』では、直接リベラルアーツにも関連づけられる語りとして、修辞は、「技術(art)としての資格をもたない一つの熟練にしかすぎない」

と明言する。この熟練とはたとえばJowettの英語翻訳では、routineである。しかもこれにand trickという表現も加えられている。修辞は知を十分に愛し求める自由人のart=術とははつきりと一線を画していたのである。

このようにソクラテスの語りを紹介したプラトンが、のちの3学の重要性を語ることを踏みとどまったことは四書『大学』にもつうじるところがあり興味深い。しかも、消極的に諦観したわけではなく、前述したようにその分をアリストテレスに託したとみてよいと思われる。

アリストテレスといえ、いうまでもなくオルガンノン=論理学体系の祖であり、詩や詩作に関しても多くの講義ノートの断片と目されるものが残されている。また修辞については当初、彼も哲学につうじる自由人の知に反するものという意見をもっていたようである。だが、その後、考えを変えて弁論術=修辞の意義を明白にする。それは簡単にいえば弁論術が説得する手段というよりも「対象に関して可能な説得の手段を観察する能力(『弁論術』)」であり、その意味でソクラテス/プラトンのいう熟練的な習慣というよりも、発見の技術=artであることを見いだしたためであった。

そこへの触発は当時アテナイで、アカデメイアとともに名をはせていたといわれる弁論家イソクラテスの修辞学校にあつたといわれ、その事情はのちになってケクロが『弁論家について』のなかで紹介している。アリストテレスはイソクラテスが弁舌巧みに弟子たちを集めて華やいでいるのに、自分が沈黙しているわけにはいかないとし、

弁論術について大いに語りはじめ、結局、弁論＝修辭と英知の融合を果たしたとしている。

ところで、これはアリストテレスが彼自身のリュケイオンで講義した頃より早い時期、アカデメイアにいた時期のことであった。このことは、アリストテレスがこうして弁論術を技術の域に引き上げた功績によって王子アレクサンダー、のちのアレクサンドロス大王の家庭教師としてマケドニアに招聘されたという経緯からわかる。リュケイオンでの講義開始はその大役を終えてアテナイに戻ってからのことだったからである。彼がアカデメイアを離れるのはプラトン没の間際だったから、イソクラテスの向こうを張った弁論術講義はプラトン存命中のことになる。その内容がソクラテスの口を借りた弁論(家)批判を乗り越えるものであったことからすれば、アカデメイアの雰囲気がよくわかるところである。つまりこの学園においてもプラトンは創立者にして学頭でありつつ実に影としてあり、きわめてアナーキカルな意味での自由のためになすべきカリスマ的なイニシアティブを発揮していたことが読みとれる。

浅羽(2004)はアナーキストに関するまとまりのよい論考のなかで、たとえば大杉栄を典型とするアナーキスト主導者の条件のひとつとしてその類のなかであからさまなリーダーシップをとることなく、しかし全体を導いていける類い希な影響力をあげている。その点でいえば、プラトンはそうした特性をもつ出色の自由性を宿していたし、みずからその点に意識的な構想力をもっていたように思える。

さて、その同じアカデメイアでおよそ200年後に学んだのがキケロである。最後にリベラルアーツということばそのものの誕生を見定めておこう、キケロはまさに修辭、弁論術の大家となったわけだが、その彼も盛んに心の涵養と徳の形成に欠かせない学芸の重要性をさまざまな書において繰り返し指摘した。彼はそれらのことを *artibus, quae sunt libero dignae*(自由人にふさわしいアーツ)とか *liberales doctrinae*(自由学問)といった呼び方をした。また、彼と同時代に生きたローマの哲人ヴァロ(Marcus Terentius Varro)も同様のことばを使っていたと伝えられている。つまり、ことばとしてのリベラルアーツの成立はこのヘレニズム期に定め置くことができそうである。

キケロは自由人にふさわしい諸学芸は教育の初期段階でおこなわれるべきものと書いている。具体的にはたとえば『弁論家について』において各所に何度か記されるが、そこでは文法(*grammaticis*; 例示として詩人研究、歴史認識、ことばの解釈、発音の抑揚)、音楽、幾何、天文、修辭、論理が列記されている。プラトンの節制に満ちた構想はこうしてアリストテレスによる3学への開花に展開し、約200年後、ヘレニズム期においてもアテナイで存続していたアカデメイアでまさに修辭を学んだキケロによってそのフルセットが認定されたわけである。そのキケロがこのリベラルアーツに関連して語ったことばを『弁論家について』から2箇所引用して本稿の結びとしよう。

「他ならぬ哲学者(*philosophi*)ならば、なるほど一人でほとんどあらゆる分野の事柄を自らの営為の対象と公言する存在なのであるが、なおかつ、ある種の定義があるのである。すなわち、神的な事柄と人間的な事柄すべての本義と本性と原因とを認識しようと努め、よく生きることの理法を把握し、それを実現しようと努める人、その人こそ、この哲学者という名で呼ばれる人である」

「学識もあり、きわめて洗練された教養人でもあったルーキリウス(Lucilius: 紀元前2世紀のローマの詩人)は常々こう語っていた。自由人にふさわしいあらゆる学術によって切磋琢磨された者以外、およそ何びとも弁論家と呼べる存在と見なしてはならないのだ、と。わたしの意見もそれと同じなのである」

あとがき

本稿ではリベラルアーツ発祥の源を探り、それがピュタゴラスからつながるソクラテス/プラトンの自由人の知にあることを確認した。またプラトンが師ソクラテスとの関係において、みずからの節制に満ちた仕事に実践し、その仕事にきわめて遠大なパースペクティブのもとでの配慮を施しつつ、アリストテレスに引き継いだ類い希な構想力についてみた。

この先はこうして誕生したりベラルアーツがその成長の過程で、どのような経緯をもって7つの要素に落ち着き、セブンリベラルアーツと称されるようになったのか。またその7の構成に3と4の下位構成があつて、前者に比重がかかっている

ような印象がしのぼされるようになったのはなぜか、そうした細かな謎に迫りながら、あらためて、それらがどうして自由の学科と呼ばれつづけ、またそれにしてはサニーサイドというよりも、どことなく湿っぽく日陰の身分にありつづけた雰囲気をもっているのか、という謎に迫っていく。

注

¹⁾ この点についてはすでに70年ほど前に、Nettleshipがその著作の冒頭で述べていることをそのまま借りておきたい。これはこの種の題材を扱おうとする場合に、とくに科学論文の執筆作法といった圧力を多少なりとも気にすれば、思考を停滞させてしまいがちになるときに、勇気を与えてくれることばでもある。紙面にゆとりが出たことを幸いに、自戒の念も含めて、少し長いが引用しておく。

「教育に関するプラトンの考えといったような、すでに論じつくされた主題についての試論を印刷に賦すからには、その点何らかの弁明があっても然るべきだと思われるであろう。それに私が何か目新しい発見をして詳述しているわけでもないから、なおのことそう思われることであろう。しかし、ギリシア思想はある意味ではいつでも若やいだものであり、その教訓は絶えず学び取られていながらも、その一方で、絶えず忘却の淵にさらされ、また誤解を受けているということも本当であると思われる。さらに、またギリシア思想を解釈するために、これまで多くの労が取られてきたし、またその研究自体は我々の学校や大学の教科課程において確立されているが、しかし、我々は多くの点でなお出発点に立っているに過ぎない。それにしばしば、型通りの意見。奇をてらった骨董趣味、あるいは感傷に走る装飾癖といったヴェールをおし、我々がその思想をみていることも本当であると思われる。私がここで試みたいっさいのことは、我々全ての者に関わる主題の中で、特に顕著なまた親しみ深い若干の点にあらためて注意を促し、さらにそれらに対応した我々自身の理論と実践についての反省を提示することである」

参考文献

- Aristotle Rhetorica. 山本光雄訳 1968 「弁論術」
山本光雄・斎藤忍随・岩田靖夫訳 『アリストテレス全集 16』 岩波書店に所収。
浅羽通明 2004 『アナーキズム』 筑摩書房。
Cicero, M.T. De Oratore. 大西英文訳 1999 「弁論家について」 大西英文訳 『キケロー選集 7』 岩波書店に所収。
半田智久 2002 構想概念の射程：想像のスペクトラムと2つの構想モード，構想研究 1, 16-30。
稲富栄次郎 1980 『稲富栄次郎著作集 2 ソクラテス プラトンの教育思想』 学苑社。
松村明編 1993 『大辞林』 三省堂。
Nettleship, R.L. 1935 The theory of education in Plato's republic. Oxford University Press. 岩本光悦訳 1981 『プラトンの教育論』 法律文化社。
Plato Phaedrus translated by B. Jowett, from <http://classics.mit.edu/Plato/phaedrus.html>.
Plato Theaetetus 田中美知太郎訳 1966 『テアイテトス』 岩波書店。
白根孝之 1952 『プラトンの教育論』 福村書店。
新村出編 1998 『広辞苑 第五版』 岩波書店。

2004年11月28日 受稿